雜傳書としての志怪書

佐野誠子

はじめに

志怪書は通常志怪「小説」と呼ばれ、現在では中國小説の嚆矢とされている。しかし、南北朝時代に形成された四部分類に子部小説家類なる分類が既に存在したのにも拘わらず、『列異傳』（魏・曹丕撰）、『搜神記』（晉・干寶撰）、『幽明錄』（劉宋・劉義慶撰）などの代表的な志怪書は當初史部に著錄されていた。また史部における下位分類は、梁の阮孝緒が編んだ目錄『七錄』[1]では紀傳錄（史部に相當）鬼神類に收められていたと考えられ、その後『隋書・經籍志』（以下『隋志』と省略）で鬼神類が廢止されるのに伴い、雜傳類に組み込まれた。[2]小南一郎氏の「顏之推「冤魂志」をめぐって―六朝志怪小説の性格[3]―」ではこの變化に對し「（梁代）當時の人々がこうした怪異の記錄にきわめて眞劍に相い對していた」とし、また「このような意識が間もなく風化していってしまったことは、『隋志』が既に鬼神類を廢していることからも知られよう」と志怪書が雜傳類に分類された理由を怪異に對する意識の風化と捉えている。小南氏が説くように唐代に入り鬼神に對する意識が風化したのだとしても、『隋志』とほぼ同時期に書かれた劉知幾『史通・雜述篇』のように、志怪書を『世説新語』などの志人書（『隋志』では子部小説家類に著錄される）と同列に扱ったり、『新唐書・藝文志』のように史部から外し子錄小説家類に分類することも選擇肢としてあり得た筈である。無論この『隋志』の分類が絶對的に正しい譯ではないが、[4]雜傳書は魏晉の史學の特徴を反映した書物であり、[5]志怪書の歷史書としての性質を檢討するためには志怪書が雜傳類に分類された意味について考察してみる必要があるだろう。しかし、從來の研究では志怪書が「史部」に屬することが强調されることはあっても、「雜傳類」に入れられることについては、ほとんど考察されていない。管見の限りでは劉苑如氏の「雜傳體志怪與史傳的關係―從文類觀念所作的考察[6]」が志怪書が雜傳類に著錄されることに注目した唯一の論考と思われるが、そのように分類された理由について、劉氏は「實錄精神」のためとのみ解説している。「實錄精神」は歷史書全體に共通する性質であり、それだけでは志怪書が雜傳類に分類される必然性は乏しい。また劉氏の論文では、志怪書と志怪書ではない他の雜傳書との關係については言及が少ない。そこで小論は志怪書以外の雜傳書（以下ただ雜傳書とした場合は志怪書以外の『隋志』史部雜傳類に著錄された書籍を指す）と志怪書を比較することにより、志怪書が『隋志』で史部雜傳類に著錄されていることの意味を探り、志怪書の性質につ

いて一つの見解を示したい。

雜傳書について

雜傳という言葉

雜傳書自體について考える前に「雜傳」という言葉の由來について考えたい。雜傳なる語の最古と思われる例は『漢書・藝文志』六藝略孝經類に著錄されている『雜傳』四篇という書名である。しかしこの書は「傳」とあっても、經書の解釋を意味する「傳」の可能性が高い。[7] この他『隋志』史部雜傳類に著錄されている書物には『雜傳』という書名が四種見えるが、[10] これらは全て佚しており、佚文も存在せずどのような書物であったかを推定する術がない。また目錄の分類に雜傳という用語が使われたのは劉宋の祕書丞王儉による目錄『七志』が最初だが、[8]『七志』は『漢書・藝文志』の元となった『七略』（漢・劉向撰）の體例を襲っており、この『雜傳』は儒家の經傳を意味する可能性が高いという。[9] そして先に言及した『七錄』は史部に相當する分類である紀傳錄を設け、その中に雜傳類という項目を立てた。

ところで、これらとは別に「雜傳」という語の用例が見える。それは『後漢書』の著者劉宋の范曄が獄中に繫がれ、處刑直前に書いた「獄中與諸甥姪書」[11] である。この中に自らが著した『後漢書』について述べるくだりがある。

本末關史書、政恒覺其不可解耳。既造後漢、轉得統緒、詳觀古今著述及評論、殆少可意者。班氏最有高名、既任情無例、不可甲乙辨。後贊於理近無所得、唯志可推耳。博贍不可及之、整理未必羞愧也。吾雜傳論、皆有精意深旨、既有裁味、故約其詞句。至循吏以下及六夷諸序論、筆勢縱放、實天下之奇作。其中合者、往往不減過秦論。嘗共比方班氏所作、非但不愧之而已。

元々は史書と關わりがなく、いつもその分かりにくさを感じているだけだった。それが『後漢書』を著してから、次第に手掛かりがつかめだした。古今の著述や評論を詳しく考察してみると、我が意を得るものはほとんどない。班固は最も高名であるが、思うにまかせて書いていて體例がないため、よしあしを判斷できない。卷末の贊は文章の筋道という點においてはほとんど得るところがなく、ただ志の部分のみが推奬できる。志の博識で幅が廣いことは及びもつかないし、整理が行き屆いているところはなかなかのものである。私の雜傳の論には、どれも明瞭な意味と深い味わいがある。切れ味も充分備わっているので、字句をきりつめた。循吏傳以下六夷傳に至る諸傳の序と論は、文章がのびのびとしていて、實に天下の傑作である。そのうちの會心の作は（賈誼の）「過秦論」にもゆめゆめ劣るものではない。いつもそれら序や傳を班固の作と比較してみるのだが、ただ恥ずかしくないというだけのものではない。

范曄は自らの著作の長所を文章にあるとした。そしてその文章とは一般の敍事の部分のことではなく、卷頭に置かれる序や卷末に置かれる贊や論といった美文を指す。この書簡によれば「雜傳」には論があり、「循吏以下及六夷」には序と論がある。「循吏以下及六夷」とは『後漢書』列傳の最後に置かれる循吏、酷吏、宦者、儒林、文苑、獨行、方術、逸民、列女、東夷、南蠻、西羌、西域、南匈奴、烏桓鮮卑の各列傳（東夷から烏桓鮮卑をまとめて六夷としている）を指す。これは司馬遷が『史記』を著した時に、政治を動かした人物以外にも歷史に關與した人物を對象とし、儒林傳や貨殖傳などを編んだことに由來す

る主題別傳記である。すると范曄のいう雜傳とは一般の列傳のみを指すことになるのだろうか。實際『後漢書』においては「循吏以下及六夷」には序文及び、論、贊が附され、一般の列傳には序文がない。しかしその『後漢書』の一般の列傳でも董卓列傳を除くと、一族、或いは何かしらの共通點がある複數の人物で一卷を構成している。そして、論や贊は一人毎ではなく、一卷に一篇づつしか附されない。これは、後半の主題別列傳のみならず、一般の列傳においてもある主題によってまとめるという意識が働いていたことを示している。實際『隋志』史部雜傳類の序文でも、雜傳書の歷史を述べる際に『史記』、『漢書』の列傳について言及している。[12] すると范曄のいう雜傳とは複數の人物の傳記をまとめたものといえる。

『隋志』史部では正史に對し雜史があり、雜傳も正規の歷史書ではないから「雜」字がつけられたのだとの考えがある。[13] もちろん雜傳書は正史に比べ記述は粗雜で、その點「雜」であることは確かである。しかしまた「雜」字には集めるという意味もあり、[14] 范曄は後者の意味で「雜」字を用いた可能性がある。

雜傳書の實際

『隋志』史部雜傳類の序文では、『史記』、『漢書』の列傳の存在に言及したあと、獨立した書物としての雜傳書の歷史が述べられている。

又漢時、阮倉作列仙圖、劉向典校經籍、始作列仙、列士、列女之傳、皆因其志尙、率爾而作、不在正史。後漢光武、始詔南陽、撰作風俗、故沛、三輔有耆舊節士之序、魯、廬江有名德先賢之讚。郡國之讚、由是而作。魏文帝又作列異、以序鬼物奇怪之事、嵇康作高士傳、以敍聖賢之風。因其事類、相繼而作者甚衆、名目轉廣、而又雜以虛誕怪妄之說。推其本源、蓋亦史官之末事也。載筆之士、删採其要焉。魯、沛、三輔、序讚竝亡、後之作者、亦多零失。今取其見存、部而類之、謂之雜傳。

また漢の時代には、阮倉が『列仙圖』を作り、劉向は經籍を校訂して、はじめて『列仙傳』、『列士傳』、『列女傳』を作ったが、いずれも各自の關心に從い、草卒にこしらえられたものだったので、正史の中には入れられなかった。後漢の光武帝ははじめて南陽（河南省）に詔して、土地の風俗について撰述させたので、沛と三輔の地には長老や節義ある人士を述べる序ができ、魯と廬江には有德のほまれ高い者や昔の賢者を記す贊が作られた。各郡國の名士を稱える文章はこの時から作られるようになった。魏文帝はまた『列異傳』を作り、鬼物怪奇の出來事を順序を立てて述べたし、嵇康は『高士傳』を作り、聖人賢者の風格を述べた。それぞれの內容毎に、それらを繼承して著述をなす者は甚だ多く、取り上げる主題も次々に廣がっていったが、そこにはでたらめであやしげな說も混じっていた。それらの源を尋ねれば、おそらく史官の筆のすさびなのだろう。文筆に携わる者は、その中の要處を採擇せねばならぬ。魯、沛、三輔の先賢傳は序も贊もなくなり、後代の作品も滅びたものが多い。ここには現存しているものを取り上げて種類別に分け、雜傳と呼ぶことにする。

ここでは雜傳書の歷史を紹介しつつ、その性質について說明がなされている。まず雜傳書の始まりとして阮倉の『列仙圖』と劉向の書が擧げられているが、『列仙圖』は書名からすると、仙人の肖像畫とそれに附せられた文章からなる書物であると思われる。「列」字から、複數の仙人を取り上げていたことが推測できる。實際、劉向の著作『列仙傳』、『列士傳』、『列女傳』はそれぞれ仙人、名士、女性の傳記を集

めた書物である。このように「列傳」であれ、「雜傳」であれ、その特徴は人物傳記を複數集めたところにあると思われる。また「郡國之讚」とあるのは『三輔決錄』などの地域別人物傳である。『列異傳』は志怪書であり、『高士傳』は有名人の傳記を集めたものである。

以上『隋志』序文では具體的な書名が擧げられているが、この雜傳類には如何なる書物がどれだけ收められているのだろうか。『隋志』史部雜傳類には、全部で二百七種の書物が著錄されており序文に「部而類之」とあるように、似通った性質の書物毎に年代順に配列されているが、小分類名は示されていない。先行研究においては『隋志』史部雜傳類と『史通・雜述篇』における歷史書分類との共通性に注目し、史部雜傳類の書籍を郡書、家史、類傳、別傳、佛道、志異の六種に分けている。[15] もちろんこのような分類法にも意味はあるが、歷代の正史に收められる目錄では、『隋志』以降、常に史部雜傳類が設けられてきた。その中でも『舊唐書・經籍志』史錄雜傳類や宋・鄭樵『通志・藝文略』史部雜傳記は『隋志』史部雜傳類と配列がほぼ對應し、かつ小分類名がある。そこで、それらを參考に新たに分類を試みた。以下に分類名と著錄册數を擧げれば者舊（地域別人物傳：三十九）、高隱（高士や隱者：十一）、孝友（孝子：九）、忠節（忠臣：六）、名士（九）、雜傳（個人の傳記・雜傳という書名のもの：八）、家傳（一族の傳記：三十）、童子（二）、交遊（五）、列女（女性：十三）、僧侶（十二）、神仙（二十四）、鬼神（志怪：三十九）となる。

この分類によれば、全ての分類名は正史の主題別列傳の題目に類似したものであることが分かる。そして、ここで擧げられている主題は、後漢末から魏晉南北朝時代に特に關心が持たれたものが多い。例えば隱者は後漢の混亂以後多く出たのであり、[16] 僧侶は佛敎傳來以後にしか存在し得ない。また范曄は『後漢書』で文苑、獨行、方術、逸民、列女と『史記』や『漢書』には見られない列傳を作ったが、これらの主題の多くは『隋志』史部雜傳類の主題と重なる。これは、范曄が獨自の見解で新しい主題別の傳を作ったのではなく、その當時關心が持たれていたことを列傳として立てたということを意味しているのだろう。[17]

志怪書も同樣にこの時代鬼神に對し强い關心が持たれていたからこそ編まれた。志怪書は史部雜傳類の中でも鬼神部から統合されたものであり、末尾に置かれてはいるものの、序文では志怪書である『列異傳』もその他の雜傳書と同列に扱われている。また序文中に「雜以虛誕怪妄之說」との表現が見えるが、これは志怪書が雜傳書に入れられたことのみを指しているのではなく、雜傳書全體にあやしげな信憑性の低い記述が混じっているという意味だと考えられる。實際に地域別人物傳や孝子傳などにも不可思議な話が見られる。つまり、雜傳書全體が一般の歷史書に比べ、草卒にこしらえられた部分があり、歷史書としての評價は低かった。大きく捉えれば『隋志』に收められている雜傳書は何れもある主題に卽して複數の人物の傳記を集めた書物なのである。[18]

志怪書が雜傳類に組み入れられた理由

以上雜傳書とは主題別の人物傳記集であることが分かった。それではなぜ、怪異のことを記した志怪書が雜傳類に組み込まれたのだろうか。この問題を文體及び著者という觀點から考えていきたい。

文體——冒頭表現を中心に——

紀傳體歷史書における列傳の主題と雜傳書の主題の間に密接な關係

があることは先に述べた。更に、内容のみならず記述方法も列傳と雜傳書の間には共通點が多い。元來歷史記錄は年號が冒頭にくるのが習わしであったが、[19] 周知のように『史記』列傳では年號を冒頭に置き、その後事件を記すという傳統的な歷史記述の方法を採用せず、冒頭に人名を配置しその人物に關する字、出身地、祖先などの情報を提示するという體裁を採用した。これが紀傳體歷史書の始まりであり、後代にも受け繼がれているが、雜傳書も同樣に年號ではなく人名が冒頭にくる記述法が壓倒的に多い。雜傳書には佚書が多く、全ての雜傳書に對して調査を行なうことはできないが、現在纏まった形で殘されている『列女傳』(漢・劉向撰)、『高僧傳』(梁・釋惠皎撰) などは全ての條が人名から書き起こされている。また『說郛』(明・陶宗儀編) に收錄される雜傳書の佚文に關しても人物名で始まる場合が大半である。

それでは志怪書の場合はどうであろうか。この問題を考えた論考として、森野繁夫氏の「異苑の通行本」[20] がある。この論文は『異苑』のみを對象としているが、志怪書の冒頭の書式を考える上で、樣々な手掛かりを與えてくれる。森野氏は、宋版をもとに明末に刊刻されたという通行本の[21]『異苑』を類書に引用されている文章と比較するため、通行本と類書に引用された『異苑』の條の冒頭の記述が人名で始まっているか、時で始まっているかを調査している。その結果、通行本では「時日」が冒頭に來て、「姓名」が後にくるものが多く、類書の方は「姓名」が冒頭になっている條が多いという。このような結果を踏まえた上で、論文では以下のように論じている。

いったい、各代の異事を記錄する正史五行志に於ては、全て「時日」が先に記され、「事柄」はその次に述べられる。この五行志の記事と同じような性質を持つ異苑說話であって見れば、「時日」を先に記す方が自然なようでもある。しかし一方、異苑の內容を見るに、著者劉敬叔の時代の宋、その前の三國、晉の人物にまつわる異聞異事がその大部分を占めている。劉敬叔において、その出來事のあった時代は分かりきったものとして、話の主人公の方により重點が置かれたとすれば、主人公の「姓名」が「時日」に先行する形が本來のものとも思える。

このように迷いつつも、最終的には類書に引用されている條文の方が、『異苑』の原本に近いとし、原本は「姓名—時日」で全體的に纏まっていたことは確實であるとしている。そして森野氏は現在の『異苑』の狀況に對し、原本以後の版本で一度「時日—姓名」で統一し直されたのだとし、現行本で「姓名—時日」となっている條については「時日—姓名」で統一された版本を入手した人物が、類書から採集したものを類書の「姓名—時日」のまま後から加えて出版したのであろうと結論している。『異苑』は森野氏が指摘するように現行本の卷四を中心に五行志的な記述の條が多く見られ、その冒頭記述は「時日」が先の場合も「姓名」が先の場合もあり、どちらが本來の書き方であるか判斷しかねる。また正史中の怪異の記錄である五行志はほぼ全ての條が年號から書き始められているが、五行志と志怪書全體を比較した時、あまり內容的な共通點は見られず、[22] 五行志的な話が多く見られる『異苑』の方が志怪書として特殊な存在だといえる。それならば、五行志的な記述の少ない一般の志怪書における冒頭部分の記述は姓名が先の場合と、時日が先の場合とどちらが多いのだろうか。森野氏の論考を基に志怪書全體の問題を考察するためには、その他の志怪書の冒頭記述がどのようになっているのかを調べる必要がある。そこで、魏晉南北朝時代の志怪書に對し、現存する單行本及び『古小說鉤沈』

表：志怪書の冒頭記述

書名	全體の條數	人名が冒頭	%	時が冒頭	%	その他	%
搜神記	464	235	51%	180	39%	49	11%
搜神後記	117	72	62%	34	29%	11	9%
異苑	382	186	49%	134	35%	62	16%
續齊諧記	22	18	82%	1	5%	3	14%
列異傳	50	40	80%	6	12%	4	8%
甄異傳	17	17	100%	0	0%	0	0%
述異記	90	59	66%	19	21%	12	13%
靈鬼志	24	19	79%	5	21%	0	0%
祖臺之志怪	15	10	67%	5	33%	0	0%
孔氏志怪	10	7	70%	2	20%	1	10%
齊諧記	15	9	60%	3	20%	3	20%
幽明錄	265	171	65%	59	22%	35	13%
集異記	11	11	100%	0	0%	0	0%
續異記	11	10	91%	1	9%	0	0%
錄異傳	27	23	85%	4	15%	0	0%
雜鬼神志怪	20	15	75%	4	20%	1	5%
合計	1540	902	59%	457	30%	181	12%

に集められた志怪書を中心に統計を取ってみた。[23] 時が冒頭の場合は、年號が冒頭にある條を、人名が冒頭の場合は、「土地・人名」「人名・土地」が冒頭にある條の兩方を數え（もちろん書き方としてはこの違いも追求する必要があるが、今はこの問題については考えない）、時日も姓名も冒頭にこない土地の傳說などを記した條をその他に分類した。結果は表のようになった。

ここで對象になった書物のほとんどは佚書であり、森野氏が考えるように引用時の改變を伴っている可能性がある。しかし、全體的な傾向として人名が冒頭である場合が過半數を占めることが分かる。そして『異苑』は表中で唯一人名が冒頭である場合の割合が半分を下回るが、これは先に述べたように、『異苑』は他の志怪書と違い五行志的な話が多いのと、また卷三などに博物的な要素を含む話が多いことを反映している。同樣に『搜神記』も全體の約半分しか人名が冒頭にこないが、これも『搜神記』卷六、卷七に五行志と關連する條が多く含まれるためであり、卷六、卷七を除外して統計を取れば人名が冒頭の割合は七割近くになる。ちなみに、この二書を外すと表中の人名が冒頭である割合は六十九%にまで上昇する。一般の志怪書の記述については類書の引用であっても人名から書き始める方が普通だったと結論して問題ないだろう。

もちろん書き出しが人名からであっても、正史の列傳のように出身地や字が示される場合もあれば、桓溫や王導などの有名人に關する話では名前のみが示され基本情報が省略される（この種の書き方は有名人ばかりを取り扱う志人書と同樣である）。また名前も分からずどこの地域の人物であるかだけを示す場合もある。これらの記述の違いについても考える必要があるが、志怪書は紀傳體の本紀や列傳と同樣に、人物

重視の書き方であり、その點において他の雜傳書と性質を同じくしているといってよいだろう。志怪書には一部に地域の動植物など博物的な內容の記述も含まれるが、基本的には人物が登場する話が記錄されているのである。例えば、五行志には、都に血の雨が降ったというような話が記錄されている。志怪書にもこのような話が記錄されても不思議ではないように思えるが、實際には『搜神記』、『異苑』の中の五行志と關連する部分を除き存在しない。

次に志怪書の實例を見てみよう。『搜神記』卷九に見える話である。

庾亮字文康、鄢陵人。鎭荊州。登廁、忽見廁中一物如方相、兩眼盡赤、身有光耀、漸漸從土中出。乃攘臂、以拳擊之、應手有聲、縮入地。因而寢疾。術士戴洋曰「昔蘇峻事、公於白石祠中祈福、許賽其牛。從來未解。故爲此鬼所考、不可救也。」明年、亮果亡。

庾亮は字を文康といい、鄢陵の人である。荊州を防備していた時のことである。厠に行くと、方相のような化け物が現れた。兩目は眞っ赤で、體は光り、地面からじわじわと出てきた。そこで腕をまくり拳で叩くと、手應えがあり、化け物はうめき聲をあげ地面に潛っていった。その後庾亮は病に伏した。術士の戴洋は「昔、蘇峻の事件があった時、公（庾亮のこと）は白石祠に幸福を願い、戰いに勝てば牛を供えると約束したのに、未だに實行していません。そのために鬼に戒められたのであり、助けられません。」といった。翌年、亮はその通り亡くなった。

この話は後半部分の戴洋の說明が『世說新語・傷逝篇』注に『搜神記』からとして引用されており、他に『太平廣記』卷三二一では『甄異錄』から、卷三六〇では『渚宮舊事』からとして同じ話が見える。また庾亮は『晉書』卷七三に傳がある晉代の將軍であるが、この傳では方相に會い死亡したのは弟の庾翼とされている。また戴洋も實在の人物で『晉書』卷九五に傳がある。幼い時に死んで生き返り、そのため占いの術に通じていたのだという。實際に庾亮の參謀として樣々な助言を與えており、牛を供えなかったから云々と庾亮に對して說明するくだりも傳に見られる。そして上の『搜神記』の文では庾亮の字と出身地が示され、その點で歷史書と同じ書き方である。ただ、この字とされている文康は實際は諡であり、情報が不正確である。

『搜神記』の文では庾亮がどんな人物であったかの說明はなく、ただ死に至る經緯のみが書かれている。そして、志怪書の他の話でも人物の全生涯が記されることはなく、大抵は一つの事件だけが記される。このような記述を傳記とみなせるのだろうか。しかし、雜傳書ではこのように主題に卽した部分のみを取り上げて記述することが一般的である。例えば、雜傳類に著錄される『高士傳』（晉・嵇康撰）佚文（『太平御覽』卷五一〇）には次のような文が見える。

鄭仲虞、不知何許人也。漢章帝自往、終不肯。起曰「願陛下何惜不爲太上君、令臣得爲偃息之民。」天子以尙書祿、終其身。世號之白衣尙書。

鄭仲虞はどこの人物か分からない。漢の章帝が自ら出向いたが、どうしても仕官の話を承諾しなかった。鄭は立ちあがり「陛下はご自身が優れた君主たらざることを殘念に思い、私めを休息できる身分としてくださるようお願いします」といった。天子はそこで尙書の給料を終身與えることにした。世間では鄭のことを白衣尙書と呼んだ。

佚文にはそれが原文でない可能性が伴うが、この文は他に『北堂書鈔』卷六〇にもほぼ同文が引用されている（『藝文類聚』卷三六にも一

部表現の異なる文が見える)。また『太平御覽』の文章に『北堂書鈔』にはない部分があり、『北堂書鈔』からの孫引きである可能性は低い。よって原文に近いと考えられる。上の文では鄭仲虞とあるが、『後漢書』巻二七の傳によると、仲虞は字で本名は均、東平任城の人であり、幼い頃から『老子』を好んだこと、兄が役人となった時に贈り物をたくさん貰うのを諫めたこと、かつて官位についたことなどが記されている。漢の章帝が鄭の宿舎を訪れ、終身尚書の身分を與えたため、白衣尚書と呼ばれたことは書かれているものの、『高士傳』にある鄭の言葉は記錄されていない。このように雜傳書における傳記とは、人物全體を見ようとするものではなく、主題に沿った斷片的なエピソードを記述することが一般的である。また上の二例は正史に傳が立てられている人物に關する話であり、豫備知識を前提として書かれたのではないかという疑問が生じるかもしれないが、志怪書や雜傳書には他に何も史料のない無名の人物の記錄が多く存在する。そして無名の人物の場合でも有名人と同樣、その人物像全體を探る手掛かりは與えられない。雜傳書は人物重視の文體を用いながらも、個々の人間像やその內面を描こうとするのではなく、興味の重點は主題に置かれていたということができよう。

著　者

『隋志』序文では雜傳書の著者について「推其本源、蓋亦史官之末事也」とし、本來は史官が書いたとの見解が示されている。それでは雜傳書の著者は具體的にどのような人物なのだろうか。雜傳書には著者不詳の書が多數あり、また著者名は分かっても傳記史料が全くないという場合も枚擧に暇がない。これは『隋志』史部全體に該當することで、史部正史類でさえ四分の一ほどの書物は著者不詳か、著者についての傳記史料が見つからない。このような狀況の中、わずかな例に限られるが、雜傳書や志怪書の著者について考えたい。

まず雜傳書の著者には王朝史を編んだ人物の名前が見える。『三國志』を編んだ晉・陳壽が『益部耆舊傳』を、『漢晉春秋』を編んだ晉・習鑿齒が『襄陽耆舊記』を、『後漢書』を編んだ吳・謝承が『會稽先賢傳』を、『晉書』を編んだ晉・虞預が『會稽典錄』を著している。ここで擧げられた書は全て地域別人物傳であり、對象となっている地域は各人の出身地である。これは歷史家として、自らの住んでいる地域の情報が手に入りやすいために編んだのかもしれないし、またこのような書物を編纂する責任が課せられていたのかもしれない。そして、志怪書の著者にも歷史家の名前が見え『晉紀』を編んだ晉・干寶が『搜神記』を、『續晉紀』を編んだ劉宋・郭季產が『集異記』(ただし『集異記』は『隋志』に著錄されてない)、『宋春秋』を編んだ王琰が『冥祥記』、『齊春秋』を編んだ梁・吳均が『續齊諧記』を著している。また史部地理類に著錄される『西征記』、『洛陽記』の著者晉・戴祚が『甄異傳』を著している。志怪書全體の數から考えれば著者が歷史家であると確認できるものは少ない。しかし逆に考えれば、このような荒唐無稽とされる書物に少數でも歷史家が含まれるという事實の方に注目すべきだろう。『史通・採撰篇』には唐代に勅撰で編まれた『晉書』以前の晉王朝に關する歷史書では志怪書は歷史史料として退けられていたとある。[24] 實際に現在十八家『晉書』の佚文を見ても、志怪書と重なる、または類似した記述はほとんど見つからないし、紀傳體歷史書の中で鬼神を主題にした列傳の存在は王隱『晉書』と何法盛『晉中興書』しか確認できない。[25] 志怪書の內容は王朝史の歷史書には書かれるべき內容でないと考えられたために、怪異のことに關心のあった

歴史家が歴史書と別に獨立した書物として志怪書を編んだ可能性がある。[26]實は地域別傳記と志怪書を除いた他の主題の雜傳書の著者には歴史家の名前が見られない。地域別傳記は紀傳體正史中の列傳とは主題の立て方が異なるため獨立した書物が編まれたが、鬼神を除くその他の主題別列傳は、彼ら自身が編んだ歴史書の中に收めることが可能である。そのため歴史家の名前が見えないのではないだろうか。

次に歴史家以外の著者に注目すると、一人で數種類の雜傳書を著している例が幾つか見られる。その初まりは『隋志』序文でも言及されていた劉向であり、『列女傳』、『列士傳』、『列仙傳』の三種類の雜傳書を編んだとされている。これらの內、確實に劉向が著したとされているのは『列女傳』のみであるが、[27]重要なのは劉向が實際の著者であるか否かではなく、主題の違う雜傳書三書が全て劉向の著作とされていることである。これらの書は主題が異なっていても、主題別傳記という點では同種の書物であり、同一人物が樣々な主題の雜傳書を複數編むことが何ら不思議ではなかったことを示唆するのではないだろうか。このように一人の人物が複數の雜傳書を編む現象は他に南朝の王族に見られる。例えば劉宋の王族である劉義慶の著作『世說新語』や『幽明錄』、『宣驗記』などは劉義慶の周圍にいた多くの文人が關わっていたとされる。またこれらの書ほど有名ではないが、『隋志』史部雜傳類には『徐州先賢傳讚』が劉義慶撰として著錄されており、『隋志』では著者が明記されないものの『徐州先賢傳』本體も劉義慶撰の可能性がある。[28]『列異傳』の著者には諸說あるが『隋志』では魏・曹丕としている。曹丕も魏の皇帝であり、同樣にその身邊に多くの文人を抱えていた。曹丕が實際に『列異傳』を編んだか否かは別として、このような文人が集まる場で種々の雜傳書を編むことが一般的な現象と考えられていたのではないだろうか。そして、劉義慶も自らの關心に從い、地域の人物や不思議な話、佛敎に關する話を配下の文人に編纂させたのではないだろうか。ここでは『徐州先賢傳』も『幽明錄』も『宣驗記』も同じ種類の書として編まれた。つまり志怪書も他の雜傳書と同じ性質の書として編まれた可能性が高い。

劉義慶以上に多樣な雜傳書を編んだのが梁元帝・蕭繹である。『隋志』史部雜傳類には、蕭繹の撰になる著作が『孝德傳』、『忠臣傳』、『丹陽尹傳』、『懷舊志』、『全德志』、『同姓名錄』、『研神記』と七種も著錄され、『隋志』には著錄されていない『仙異傳』も書名からすると雜傳類に分類されるべき書物と推測される。蕭繹は新しい主題で雜傳書を書こうという意欲があり『忠臣傳』序文（『藝文類聚』卷二〇）では、次のように述べている。

孝子、烈女、逸民、咸有別傳。至於忠臣、曾無述製、今將發篋陳書、備加論討。

孝子、烈女、逸民に關してはどれも別傳がある。しかし忠臣に對しては、今まで作られたことがなかった。今、文箱を開いて書物を編み、議論の材料としたい。

ここでは雜傳という語ではなく別傳という言葉を用いてではあるが、主題別傳記の編纂について述べている。蕭繹の兄である昭明太子・蕭統は『文選』の編者である。そしてこの編纂の背景には蕭統を中心とする文人集團の存在が既に指摘されている。[29]蕭繹の場合も蕭統と同じく、周圍の人物に雜傳書を編集させたのではないだろうか。『梁書』卷五及び『南史』卷八には蕭繹の交遊について以下のようにある。

世祖不好聲色、頗有高名、與裴子野、劉顯、蕭子雲、張纘及當時才秀爲布衣之交、著述成章、多行於世。

世祖（蕭繹のこと）は音樂や女色を好まず、非常に高名であった。裴子野、劉顯、蕭子雲、張纘及び當時の秀才達と利欲に關わらない交わりを結んだ。著述や文章が多く世に出た。

ここで裴子野は裴松之の子孫で、沈約の『宋書』を要約して書き直した『宋略』や『衆僧傳』を編み、劉顯は五兵尚書傅昭が國史を撰する時に補佐として働き、蕭子雲は『晉書』を著した。張纘を除くと誰もが歴史書の編纂に携わった經驗を持つ。また蕭繹の周圍にいる文人は華美な詩を作る文人ではなく、古體派が中心であったとの指摘がある。[30] 蕭繹は彼らに雜傳書を編纂させていたのではないだろうか。また蕭繹にとって雜傳書を編むことは、自分で序や贊、論を書くことが目的であり、現在も『藝文類聚』などにその一部が殘されている。そして志怪書である『研神記』も蕭繹の現存する著作『金樓子』卷五の注に「金樓自爲序、付劉彀纂次。（金樓（蕭繹の號）は自ら序文を作り、劉彀に編纂をゆだねた。）」とある。このように蕭繹は孝行な人物も、また仙人も怪異も同じように記錄としてまとめ（或いはまとめさせ）、序や贊、論を書いたものと思われる。

南朝の貴族の間では、周邊の文人に様々な種類の人物傳を編纂させ、序や贊を書くことが流行していたのではないだろうか。そして、彼らの認識では志怪書も雜傳書の一種であり、何ら特別なものではない。

この他、雜傳書も志怪書も歴史史料として『三國志』や『後漢書』の注に引用されていること、どちらも取材源に口頭と書物の兩種の史料を用いていることなど、[31] 雜傳書と志怪書の間には共通點が多い。また、北宋に編まれた類書『太平廣記』も、志怪書のみならず、様々な雜傳書からの話を收錄している。『太平廣記』は題材別の配列であり、小題はほとんど人名が用いられている。これは、志怪書に限らず人物重視の雜傳書を多く收錄していることを反映しているのだろう。

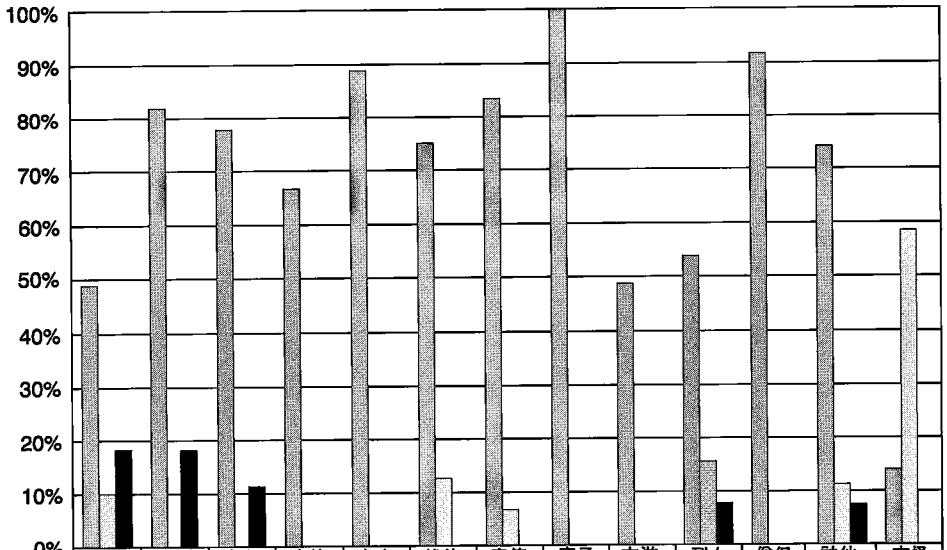
志怪書と雜傳書の違い――書名からの考察――

ここまで筆者は志怪書が雜傳書と同じ性質を有していることを强調してきた。しかし、また志怪書は『新唐書・藝文志』以降史部から外されたという事實も無視できない。その理由については、志怪書は怪異のことのみを記しており、北宋時代の考えでは歴史書と見なすことはできなかったからだという説明がなされる。この説明に異議はないが、志怪書の內容のみならず、志怪書が元々他の雜傳書と異なる部分も孕んでいたということについて書名を手掛かりに考察したい。

小南一郎氏の「語から説へ――中國における「小説」の起源をめぐって――」[32] 及び同氏の「語り物文藝の形成――漢から宋へ――」[33] では劉向『新語』や劉義慶『世説新語』など書名に「語」や「説」の言葉がつく書物は、背後に語りの場があり、語りを記錄した書なのではないかと論じている。そして、小南氏は志怪書成立の背景にも中下層の役人を中心とした語りの場があり、そこで語られた話が志怪書に記されたのではないかと考えている。しかし、小南氏が指摘するように、志怪書の文體はあくまでも歴史書の文體であり、語りの様相をそこから窺うことはできない。實際、志怪書の書名で「語」や「説」の語がつくものは全くないのである。逆に語りを意識して記錄した『世説新語』等は『隋志』においても既に子部小説家類に分類されている。それでは、志怪書や雜傳書はどのような意識で編まれたのだろうか。小南氏の考え方を應用し、書名からその意識を探りたい。

『隋志』史部雜傳類に著錄されている書名の最後の一字について調

グラフ：『隋志』史部雑傳類書名末尾字比率



	耆舊	高隠	孝友	忠節	名士	雑傳	家傳	童子	交遊	列女	僧侶	神仙	志怪
傳	49%	82%	78%	67%	89%	75%	83%	100%	40%	54%	92%	74%	14%
記(紀)	10%	0%	0%	0%	0%	13%	7%	0%	0%	15%	0%	11%	58%
贊(讃)	18%	18%	11%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	8%	0%	7%	0%

べると、傳、記（紀）、贊（讃）、錄、志、頌、序字などがある、その内「傳」字が最も多く、全體の約六割を占める。「傳」字はこの場合「傳記」の「傳」であり、當然の結果だといえる。そして注目すべきは、志怪書の書名が史部雑傳類の全體の傾向と異なっていることである。ここに擧げたグラフは先に分類した雑傳書の内容毎に、書名の末尾一字が何であるかを示している。ここで一目瞭然なのが志怪書の「傳」字の少なさである。志怪書のみ比率は二割を下回り、逆に他の内容の志怪書では二割を越えることのない「記」字のつく書名が「傳」字を逆轉し六割近くある。それでは「傳」と「記」との關係はどのようなものなのだろうか。これに關して興味深い例がある。『襄陽耆舊記』（晉・習鑿齒撰）は『隋志』では書名の最後が「傳」ではなく、「記」となっている。また『新・舊唐志』では共に『襄陽耆舊傳』と「傳」になっている。これに對し『郡齋讀書後志』（宋・晁公武撰）では書名を『襄陽耆舊記』とした上で以下のように述べている。

前載襄漢人物、中載山川城邑、後載牧守。觀其記錄叢雜、非傳體也。名當從隋志。

前卷では襄の地域の人物のことを記載し、中卷では山や川、城郭のことを記載し、下卷は地方長官のことを記載している。その記錄を見ると雑多であり、傳の形態ではない。書名は『隋志』に從うべきである。

晁公武は人物以外のことを載せている書に「傳」の語は不適當としている。[34] この考え方はもちろん晁公武個人の見解であるが、「傳」は純粋な人物傳記であり、「記」は人物以外の情報も入っている書であると定義することもできよう。そして「傳」も「記」も歴史書であることを示す文字であることは共通している。[35]

『隋志』に著錄される志怪書の內「傳」字で終るのは『列異傳』、『古異傳』など成立時期の古い書に偏っており、一番時代の下る『甄異傳』も晉代の書物である。[36] そして唐代に書かれた志怪書では『神仙後傳』（王方慶撰）、『後仙傳』（蔡偉撰）など神仙關係の書物を除くと末尾に「傳」字のつく書名はほとんど見られない。唐代の志怪書は『廣異記』（戴孚撰）、『玄怪錄』（牛僧孺撰）など、大多數が「記」、「錄」、「志」字を用いている。そして「傳」字がつくのは「補江總白猿傳」（著者不詳）、「李娃傳」（白行簡撰）など單行の傳奇となるのである。「傳」字が用いられなくなることは、志怪書の關心が、人物から怪異な事件自體へと移っていったことを意味するのだろうか。しかし、先に擧げた表では時代の推移による冒頭記述の割合の變化は見出せない。これらの變化に關しては、志怪書間の記述の違いを更に踏み込んで考察する必要があり、將來の課題としたい。

また地域、聖賢、孝子、列女で比較的見られる「序」、「贊」字がつく書名も志怪書には全くない。「序」、「贊」とはその人物を稱える韻文形式の文章である。これらの人物の場合、本人の主體的な行動が突出していたために記錄が殘された。それに對し、志怪書では人物は出てきても、大抵は怪異に何ら抵抗することのできない有樣が描かれているのだから、賞贊の對象とはなり得ず、「序」や「贊」が書かれにくい。神仙の傳記に關しては、「異」なることが記されていても、志怪書とは違い、記錄される人物は信仰の對象であったため、「序」や「贊」が書かれる。また志怪書とは違い、後世でも書名に「傳」字が用いられ續ける。ここからも同じ人物傳記であっても、志怪書は他の書と違う部分があったことが分かる。先に取り上げた范曄の書簡では、范曄は自らの傳に付した序や論の文章が素晴らしいとしていた。これは傳の中身よりもそれに附帶した美文を重視しているのである。また梁元帝蕭繹も自ら序を著すことに心血を注いでいた。このように考えると雜傳書には四六駢儷文の流行の影響が見られるが、志怪書の場合は干寶『搜神記』に變化論、妖怪論が殘されているのを除くと、他にその種の文章も殘されておらず、美文を著すために編まれたことは少なかったと考えられる。

結　語

以上志怪書が雜傳書に分類されることの意味を考えてみた。大きく捉えれば志怪書は特に初期においては他の雜傳書と同じく集合體の傳記として書かれたと考えることができよう。雜傳書が書かれた背景には魏晉南北朝時代の個人意識の覺醒があるとの指摘が既になされている。[37] この時代の個人とは、西洋近代的な人格を持った個人と考えることはできないだろう。しかし、それまでの歷史が王朝、國家のあり樣のみを考えていたのに對し、魏晉以降は有名人であれ、無名人であれ、一人一人がどのようであったかということに關心が向け始められたという點では重大な變化だといえよう。例えば、魏晉以前でも正史中の五行志には怪異の記錄が見られる。しかし、それらは怪異事象に卷き込まれた人物に興味がある譯でなく、怪異事象が國家の運命を暗示するものと考えられていたため記錄された。[38] それに對し、志怪書及び雜傳書の場合、これらの書物は國家・王朝のために記されたのではない。いわば魏晉南北朝時代は從來の王朝史に限定されていた歷史概念の範圍が擴大した時期なのである。その中で雜傳書が書かれ、志怪書もその風潮の一翼を擔っていた。そして志怪書も怪異を主題とした人物傳記集としての性格を有していたことからすれば『隋志』が史部

雜傳類に志怪書を組み込んだのは合理的な分類であったといえるのである。

注

(1) 現在は『廣弘明集』(唐・釋道宣撰) 卷三に見られる佚文で序文、分類、收錄書數及び卷數が分かる。

(2) 姚明達『中國目錄學史』(原著一九三七、臺灣商務院書館一九七四年版、王雲五・傅緯平編) 九一頁、倉石武四郎『目錄學』(東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター一九七二) 六四頁等參照。

(3) 『東方學』六五、一九八三。

(4) 例えば戸川芳郎「四部分類と史籍」(『東方學』八四、一九九二) では『隋志』が史部に收める王朝史の歷史書を正史、古史、雜史と分類してしまったためにかえって當時の歷史書の實際が分かりにくくなっていることを指摘し、また清水凱夫「隋書經籍志の位相と改訂復元法」(『日本中國學會報』五一、一九九九) は、『隋志』の體裁上の矛盾を指摘し、その混亂が生じた背景について考察している。

(5) 逯耀東「『隋書・經籍志・史部』及其「雜傳類」的分析」(『魏晉史學的思想與社會基礎』東大圖書公司二〇〇〇) では雜傳書が魏晉の史學の隆盛と同時に大量に編まれるようになった書物であり、魏晉の史學の特徵をなすものだとしている。

(6) 『中央研究院中國文哲研究集刊』八、一九九六。

(7) 鈴木由次郎譯注『漢書藝文志』(明德出版社一九六八) 一〇七—八頁では、『今文孝經』の解釋について劉歆が諸家の說を集めたものとしている。

(8) 『隋志』總序「元徵元年、祕書丞王儉又造目錄、大凡一萬五千七百四卷。儉又別撰『七志』一曰經典志、紀六藝、小學、史記、雜傳。二曰諸子志、紀今古諸子。三曰文翰志、紀詩賦。四曰軍書志、紀兵書。五曰陰陽志、紀陰陽圖緯。六曰術藝志、紀方技。七曰圖譜志、紀地域及圖書。其道、佛附見、合九條。然亦不述作者之意、但於書名之下、每立一傳、而又作九篇條例、編乎首卷之中。文義淺近、未爲典則。」

(9) 李祥年『漢魏六朝傳記文學史考』(復旦大學出版社一九九五) 一三九頁、注一五參照。

(10) 梁・任昉撰一百四十卷、梁・賀蹤撰七十卷、晉・陸澄撰十九卷、著者不詳十卷。これらの內、任昉と賀蹤の書は『隋志』の時點で佚書となっている。

(11) 『宋書』卷六九范曄傳。また『南史』卷三三范曄傳及び『後漢書』卷七六循吏傳の章懷太子注にも見られる。

(12) 『隋志』史部雜傳類序文「司馬遷、班固、撰而成之、股肱輔弼之臣、扶義俶儻之士、皆有記錄。」

(13) 注 (6) 前揭劉苑如「雜傳體志怪與史傳的關係」三六九頁。

(14) 『方言』卷三「雜、集也」。

(15) 注 (5) 前揭逯耀東論文。劉苑如「雜傳體文類生成初探」(『鵝湖』二四一、一九九五) では同じく『史通・雜述篇』をもとに郡書、家史、類傳、別傳、雜記の五種に分ける。また小林昇「魏晉時代の傳記と史官」(『中國・日本における歷史觀と隱逸思想』早稻田大學出版部一九八三) では家史と別傳を一つにまとめ四種に分ける。

(16) 小尾郊一『中國の隱逸思想—陶淵明の心の軌跡』(中央公論社一九八八) では范曄が逸民傳を立てたのは、その時代に隱者が多かったからだと述べている。范曄の隱逸に對する考えは、吉川忠夫「范曄と後漢末期」(『中國精神史研究』同朋社出版一九八四、第Ⅱ部范氏研究第六章) に詳しい。

(17) 吳樹平「紀傳體史書中『列女傳』創始考」(『中國史研究』一九八七—四) では紀傳體歷史書における列女傳の創始者は范曄ではなく、そ

れ以前の『東觀漢記』や謝承『後漢書』に既に列女傳が存在した痕跡が見られるとする。

(18) この時代一人物のみを取り上げた個人の單行傳記も多く編まれたようであるが、『隋志』にはそのような書物はほとんど著錄されていない。『隋書經籍志考證』（清・章宗源撰）は諸書に見える未著錄の個人傳記の書名を集め補足して擧げている。またこのような個人傳記に關しては注（15）前掲小林昇「魏晉時代の傳記と史官」及び逯耀東「魏晉別傳的時代性格」（『魏晉史學的思想與社會基礎』東大圖書公司二〇〇〇）に詳しい。

(19) 先秦の歷史記錄の記述方法については、貝塚茂樹「古代に於ける歷史的記述形態の變遷」（『貝塚茂樹著作集』第七卷、中央公論社一九七七）等參照。

(20) 『中國中世文學研究』一、一九六〇。

(21) 胡震亨が序文で『異苑』の宋版を發見し出版したと述べる。

(22) 拙論「五行志と志怪書―「異」をめぐる視點の相違」（『東方學』一〇四、二〇〇二）參照。

(23) 利用したテキストは『搜神記』（中華書局一九七九）、『搜神後記』（中華書局一九八一）、『異苑』（中華書局一九九六）、『續齊諧記研究』（文史哲出版社一九八七）、『古小說鉤沈』（『魯迅全集』第八卷、魯迅全集出版社一九三八）である。『古小說鉤沈』に關しては、佛教志怪は除外し、十條以上收錄されている書に限り統計を取った。

(24) 「皇朝新撰晉史、多採以爲書。夫以干、鄧之所糞除、王、虞之所糠粃。（唐王朝は新たに『晉書』を編んだが、（志怪書から）多くを採用した。それは干寶や鄧粲が除外したものであるし、王隱や虞預が價値がないとしたものである。）」

(25) 『史通・書事篇』「王隱、何法盛之徒所撰晉史、乃專訪州閭細事、委巷瑣言、聚而編之、目爲鬼神傳錄。（王隱や何法盛が編んだ晉の歷史書は、地域の取るにたらない事件や、巷のつまらない噂話ばかりを取材して、集めて編集し、鬼神傳としている。）」

(26) 竹田晃「干寶試論―「晉紀」と「搜神記」の間―」（『東京支那學報』一一、一九六五）では、干寶は『晉紀』を編纂する時に採用しなかった史料で『搜神記』を編んだのではないかとしている。

(27) 三書の內『漢書・藝文志』や『漢書』卷三六劉向傳では『列女傳』の書名しか見られない。また下見隆雄『劉向『列女傳』の研究』（東海大學出版會一九八九）では劉向自身が『列女傳』を著したことについて詳しく考證を行っている。

(28) 『宋書』卷五一、『南史』卷二三の劉義慶傳では「撰徐州先賢傳十卷」とある。『新唐書・藝文志』及び『通志』では『徐州先賢傳』は王義度撰となっている。

(29) 森野繁夫『六朝詩研究』（學習研究社一九七六）八二頁による。

(30) 注（29）前掲森野繁夫『六朝詩研究』一二一頁參照。

(31) 志怪書の資料に口頭と書物の兩者があることについては內田道夫「志怪の成立」（『中國小說研究』第二章、評論社一九七七）參照。雜傳書も『三輔決錄』（後漢・趙岐撰）序文（『後漢書』卷六四趙岐傳注に見える）に「耳能聽而聞故老之言」とのくだりがあり、また先に本文で擧げた蕭繹『忠臣傳』序文に「今將發篋陳書」とあり、口頭、書物兩方の史料を用いていたと推測される。

(32) 『中國文學報』五〇、一九九五。

(33) 『神奈川大學中國語學科創設十周年記念論集　中國通俗文藝への視座―新シノロジー・文學篇』東方書店一九九八。

(34) ただし『隋書經籍志考證』（清・章宗源撰）ではこの考えに對し梁代に既に『襄陽耆舊記』と『襄陽耆舊傳』の兩方の書名が見えることから、「記」と「傳」の二書が存在したのではないかと考える。

(35) Robert Ford Company, *Strange Writing—Anomaly Accounts in Early*

Medieval China (Albany : State University of New York Press, 1996) 二八—二九頁では志怪書書名について（1）動詞（2）「異（strange）」を示す名詞（3）「記錄（record）」を示す名詞よりなる三字という構成が見られるとする。三字目に頻繁に用いられる「記」「錄」「傳」字などが歴史文獻を示すことは指摘するものの、これらの字の意味の違いについては考察していない。

(36) 『甄異傳』は類書によっては『甄異記』、『甄異錄』として引用されている。袁行霈・侯仲義編『中國文言小說書目』（北京大學出版社一九八一）一八頁參照。

(37) 逯耀東「魏晉史學的時代特質」（『魏晉史學及其他』東大圖書公司一九九八）參照。

(38) 注（22）前掲拙論「五行志と志怪書—「異」をめぐる視點の相違」參照。

本稿は文部科學省科學研究費（特別研究員奬勵費）の交付を受けた研究成果の一部である。